それぞれが自分のエリアの中にいる。水を持っているものを入れたカップやタンブラーを持っているものなどそれぞれ。飲み物

晴海　「えー、みなさん、本日はお忙しい中」
弓枝　「あ、お父さん、晴海が映ったわよ。お父さん」
文蔵　「おぉ、どれどれ」
弓枝　「晴海ぃ」

弓枝が画面に向かって手を振る。

晴海　「……えっと、お忙しい中、亡き夫・片倉陽太の一周忌法要に」
弓枝　「あれ？こっちの声は聞こえてないのかしらね、晴海ぃ」
文蔵　「聞こえてないんじゃないか」
弓枝　「そうよね」
晴海　「一周忌法要に」
文蔵　「聞こえてたら返事ぐらいするだろう」
晴海　「一周忌法要に、こうしてパソコン越しではありますが、お集まり頂きまして誠に」
文蔵　「にしても、晴海、老けたんじゃないか」
弓枝　「そう？あ、お父さん、ここ、髭剃り残し」
文蔵　「やっぱり３０手前になると肌の質感が」
弓枝　「肌とか、そういうのやだよぉ、もう」
晴海　「聞こえてますよ！聞こえてます。聞こえているのでお静かに」
弓枝　「あら？」
哲　　「だよな。聞こえてるんだよな」
憲正　「そうだと思います」
哲　　「うちだけ聞こえてるのかと思った」

それぞれにこやかな雰囲気。

晴海　「えっと、申し訳ありません。あの、今声を出していたのは私の両親でして」

---

1 脚本カルテ

【重い／良い点】
この箇所をこう読みました：晴海は同じ「一周忌法要に」を三度言い直している。一度目は母の「晴海ぃ」に、二度目は父の「聞こえてないんじゃないか」に、三度目は父の「老けたんじゃないか」に割り込まれ、どれも最後まで言い切れない。

この箇所がしていること：言い直すたびに一言ずつ先へ進み、割り込む両親の話は一段ずつ私的で失礼になっていく。晴海の挨拶が前に進むほど、両親の会話が深みにはまる、二本の線が逆向きに走る組み方になっている。

この場面の笑いの土台です。晴海が怒り出す前に、観客は「次はどこまで言えるか」を数え始めるので、三度目で「誠に」まで届いたところで遮られる悔しさが、そのまま「聞こえてますよ！」の爆発の力になります。言い直しの三回を、両親の三段の失礼さと一対一で噛み合わせている点が正確です。

2 脚本カルテ

【中／気になる点】
この箇所をこう読みました：文蔵は二つ前の「晴海、老けたんじゃないか」の続きを話している。間に弓枝が「髭剃り残し」と話を父自身の顔へ逸らしたのに、それを聞かずに娘の肌の話へ戻っている。

この箇所がしていること：文蔵が人の話を聞かない人だと、観客に最初に見せている台詞。弓枝の話題逸らしは同時に「あなたの顔も衰えている」という切り返しにもなっていて、それが空振りに終わる。

直す箇所ではなく、効かせる箇所として読みました。文蔵は自分に都合の悪い話を聞かない人で、その性質は少し後の「お前、だから言っただろう」でもう一度出てきます。「聞こえてないんじゃないか」と言い張ったのは文蔵自身なのに、弓枝のせいにしている。二つが同じ人の癖だと観客に繋がると、文蔵が一気に立ちます。いまは二つの間が少し離れているので、繋がるかどうかは演じ方に預けられています。

もし「いまのまま、弓枝の「髭剃り残し」を挟んだ形で残す」としたら　→　弓枝の切り返しが空振りする可笑しさが残り、文蔵が聞いていないことが最もさりげなく伝わる。気づく観客と気づかない観客に分かれる

もし「文蔵が「髭剃り残し」に一瞬だけ顎を触ってから「やっぱり３０手前に」と続けるト書きを足す」としたら　→　聞こえてはいるのに受け流した、とはっきりする。後の「だから言っただろう」の作り替えと同じ癖として、観客の中で確実に繋がる

もし「弓枝の「肌とか、そういうのやだよぉ、もう」を削り、文蔵の台詞から晴海の「聞こえてますよ！」へ直に繋ぐ」としたら　→　晴海の爆発が一拍早くなり、笑いは鋭くなる。代わりに、弓枝も一緒に娘を話題にしている共犯の空気が薄れる

3 脚本カルテ

【中／気になる点】
この箇所をこう読みました：両親の私語が全員に聞こえていたと分かった直後の、参加者全体の様子を書いたト書き。この後、晴海が皆に詫びる。

この箇所がしていること：法要の場が、最初の失敗で一度緩む瞬間を示している。このあと晴海の詫び、紗英の挨拶、「シー周忌」と、場が和んだ前提で笑いが続いていく。

「雰囲気」は結果なので、俳優が何をすればそうなるかが書かれていません。十数人が画面の枠に並ぶ場面では、全員が同じように微笑むと絵が平らになります。誰が笑って誰が笑っていないかで、晴海がどれだけ恥ずかしいかが決まるので、ここは一人か二人に具体的な動きを振っておくと、演出の手がかりになります。

もし「「何人かが吹き出すのを堪える。紗英だけが声を出して笑ってしまい、口を押さえる」とする」としたら　→　晴海の恥ずかしさが一段上がり、直後の紗英の「おじさん、おばさん」への入りも自然になる

もし「「笑いかけた者が、遺影に気づいて顔を戻す」とする」としたら　→　一周忌の場だという重しが一瞬戻り、次の「シー周忌」の不謹慎さがより可笑しくなる

もし「いまのまま残す」としたら　→　場の空気を演出家と俳優に全面的に委ねることになる。稽古場で決めればよいが、台本だけ読んだ人には温度が伝わりにくい

弓枝「あら、恥ずかしい、みなさんに」
文蔵「お前、だから言っただろう」
弓枝「何も言ってないじゃない」
紗英「おじさん、おばさん、ご無沙汰しています」
弓枝「あら、紗英ちゃん？綺麗になってぇ」
晴海「お母さん！」
弓枝「（空気を読んで）あ、そうよね。一周忌一周忌、シー、お父さん、一周忌だからシー、シー周忌シー」
文蔵「シーシューキ」
弓枝「シューキ、シーシューキ、シー」
晴海「みなさんすいません。えー、改めまして、皆様ありがとうございます。早いもので夫が病気で他界してから一年が経ちました。そこで本日は永生寺の、永生寺のえっと…」
海門「永生寺海門と申します」
晴海「海門さんにおちみ、おみちち、お導き頂きます」
文蔵「相変わらず大事なところで滑舌が悪いな」
弓枝「可愛いじゃない」
文蔵「昔から緊張するとキャツゼツが悪くなる」
弓枝「お父さんも言えてないわよ」
晴海「おみちちびき頂きます！」
紗英「強引に行った。さすが晴海」
憲正 4 哲「おい、憲正、見てみろよ、坊さんハゲてないな」
哲「あ、ハゲてないっすね」
憲正「なんだぁ、ハゲてないのかぁ」
哲「せっかくなんでハゲてて欲しかったっすね」
海門 5 「（咳払い）ええ、永生寺で昨年から住職を勤めさせて頂いております。本日は」
哲「ハゲてないのか」
憲正「ハゲてて欲しかったっす」
海門「本日はよろしくお願いします」

4 脚本カルテ

【重い／気になる点】
この箇所をこう読みました：哲は少し前に「聞こえてるんだよな」「うちだけ聞こえてるのかと思った」と言っていて、この場の声が全員に届くことを分かっている。その哲が、住職本人に聞こえる状態で「ハゲてないな」と言い、咳払いのあとも憲正と繰り返している。

【確認させてください】哲は「全部聞こえている」と分かったうえで、それでも口に出してしまう人物として書かれていますか？それとも、両親の件のあとにミュートにしたつもりでいる、という流れでしょうか。前者であれば、この指摘は演出の加減の話になります。

この箇所がしていること：両親で見せた「自分の声は届いていないと思い込んでいる人」の笑いを、別の組でもう一度やっている。観客はもう約束事を知っているので、言った瞬間に「聞こえてるよ」と先回りして笑える。

二度目の同じ笑いとしてはよく効く位置です。ただ、哲は両親と違って「全部聞こえる」と一度はっきり口にしています。そのため、観客の一部には「さっき分かっていたのに」という引っかかりが残ります。哲が忘れっぽい人物として書かれているなら、その癖がここで初めて見えることになるので、手前にもう一つ小さな兆しがあると笑いに変わります。

もし「哲が「ハゲてないな」の前に、自分の画面のミュートを押したつもりで別のところを押す書きを足す」としたら　→　哲は分かったうえで失敗した人になり、「さっき分かっていたのに」の引っかかりが消える。咳払いのあとの繰り返しは「まだ気づいていない」可笑しさとしてそのまま生きる

もし「哲の「うちだけ聞こえてるのかと思った」を削る」としたら　→　哲も両親と同じ思い込みの人になり、住職の件は素直な二度目になる。代わりに、両親の件で場が和む一押しが一つ減る

もし「いまのまま残し、哲は分かっていても口に出してしまう人物だと演出で見せる」としたら　→　哲の無神経さそのものが笑いになる。ただし法要の場なので、観客が哲に引いてしまう危うさも出る。住職の咳払いに哲がどう反応するかで、その加減が決まる

5 脚本カルテ

【細かい／気になる点】
この箇所をこう読みました：住職の海門が、禿げていないと噂された直後に、咳払いで話を戻して自己紹介している台詞。

この箇所がしていること：住職が聞こえていたことを咳払いで示しつつ、何事もなかったように役目に戻る。住職の落ち着きを見せる台詞でもある。

海門の台詞の「勤める」は、役目や役職を担う意味では「務める」が正しい表記です（「勤める」は勤務の意味）。俳優の読み方は変わりませんが、台本として外に出すときや、パンフレットに引用されるときに気づかれやすい箇所です。

もし「「住職を務めさせて頂いております」と直す」としたら　→　海門の自己紹介が正しい表記になる。台詞の音も意味も変わらないので、稽古には何も影響しない